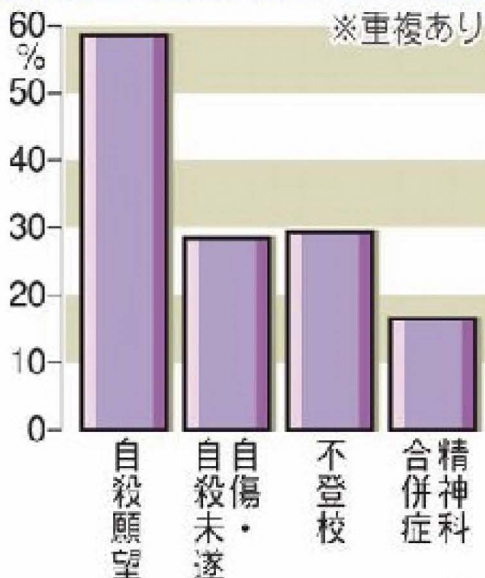


半数以上が自殺願望 小学校入学前に違和感 性同一性障害の子どもたち

心と体の性が異なる性同一性障害の男の子を、埼玉県の小学校が女の子として受け入れた事例などをきっかけに、文部科学省は昨年、性同一性障害の児童や生徒に対する相談の徹底や医療機関との連携を全国の小中高校に求めた。性同一性障害の実態はあまり知られていないが、半数以上の患者は小学校入学前から自分の性に違和感を持ち、自殺したいと思いつめたりしていることが専門家の調査で分かった。

性同一性障害に伴う問題



(全体=約1150人、岡山大病院
ジェンダークリニックによる)

▽1校に1人？

性同一性障害は、体の性は男性だが心は女性であるMTFと、体の性は女性だが心は男性であるFTMのケースがある。

岡山大病院ジェンダークリニックの中塚幹也教授（産婦人科）によると、原因ははっきり分かっていないが、胎児期に外部からのホルモンにさらされるなど、何らかの原因で体の性とは異なった方向に脳の性分化が進んだという説が知られている。性行動に関係の深い脳の部分の大きさや神経細胞の密度が、体の性とは異なる特徴を示しているとの報告もある。

家庭での育て方の問題ではなく、いくら説得しても「男（女）らしくしろ」と叱っても、精神療法によっても、心の性は変えることができないとされている。

日本精神神経学会が2007年に行った調査では、性同一性障害で医療機関を受診している患者は全国で約7千人。海外ではMTFは1

万人に1人、FTMは3万人に1人との報告がある。

中塚教授は、体の性への違和感がある人や、そうみられる人の割合を各地で調べた結果に基づき「千人に1人、大きな学校だと1人くらいいる可能性もある」とみる。

▽物心つくころ

中塚教授らは、1999～2010年に同クリニックを受診した成人を含む性同一性障害の患者1167人を調査。すると、自分の性に違和感を覚え始めた時期は中学校卒業までが90%、FTMの患者に限ると小学校入学前が70%にも達した。「半数強が物心つくころには違和感を持っている」と中塚教授。

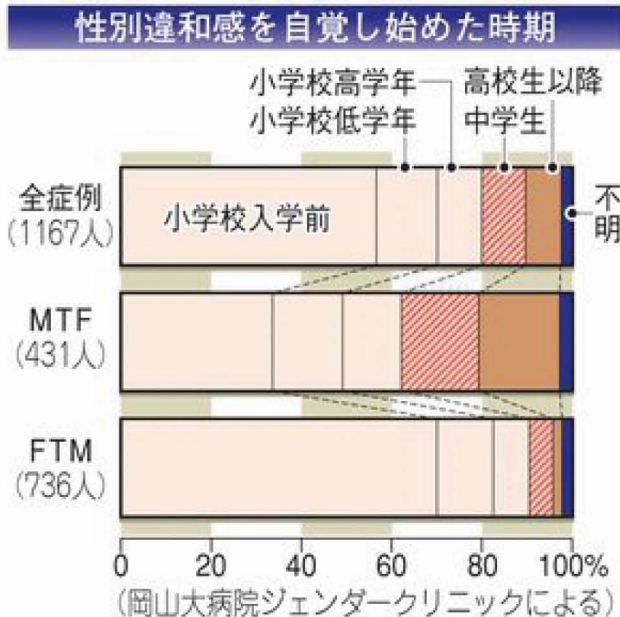
違和感や悩みの具体的な内容は、FTMでは「ペニスがないなど性器に関して」や「月経や乳房発育など第二性徴に関して」などが多く、MTFでは「ひげが生えるのが嫌だ」や「誰にも分かってもらえない」といった悩みが多かった。

患者約1150人の分析では、自殺しようと思った人が59%、自傷や自殺未遂をしたことがある人が28%、不登校になった人が29%など、苦悩の深さがうかがえた。

また、人間関係などが原因と考えられるうつ状態や神経症などの精神科合併症もMTFの4人に1人で見られた。自己判断でホルモン剤を個人輸入し、治療していた18歳未満のケースでは、血管内で血が固まる副作用の検査がされていない可能性もあった。

▽性教育の一環

性同一性障害の治療では、ホルモンの投与や性別適合手術が知られているが、それだけではない。希望する性の



特徴を促進させないが、体の性の特徴を抑制して性の違和感を緩和する方法など、成長に応じたさまざまな治療法があるという。

中塚教授は「性教育の一環として、小学校高学年までには性同一性障害について説明するのが望ましい」と話す。性同一性障害の治療は、各地のジェンダークリニックや精神科が窓口となる。（共同通信 戸部大）（2010/1/25）



岡山大病院ジェンダー
クリニックの中塚幹也教授

つぶやく

